産経新聞
平成２３年（2011年）５月７日　土曜日

H23. 5. 7

それぞれの津波と防災意識

Dr. 和の町医者日記

東日本大震災特集②

ボランティアは自己完結で

私は4月28日から7泊8日の予定で東日本大震災の被災地入りし、岩手県、宮城県と南下しながら傾聴ボランティアを行っている途中です。遠野市、大槌町、釜石市、陸前高田市、大船渡市、気仙沼市（大島を含む）、南三陸町、女川町、石巻市、東松山市、仙台市、名取市とゆっくりとかなり危険な場所も含めてクネクネと回ってきました。

最初の4日間の移動距離は560キロ程度。毎朝7時に出発し、様々な場所での傾聴、支援物資の手渡し、夜は現地での情報交換、深夜は震えながら原稿書きをしています。今後、相馬市、南相馬市、いわき市と南下する予定ですが、ちょうど半分の行程を終えた時点での文章です。

4人組の変なオッサンですが、避難所、病院、巡回診療のみならず、茫然（ぼうぜん）とする被災者の生の声を聞き、記録もしています。1日1日があまりにも重く、切なく、100年分（まだ生きていませんが）にも感じます。いくら阪神・淡路大震災を経験したとはいえ、全く異質の災害。阪神は「地震」でしたが、東日本は「大津波」です。

沿岸部はまさに壊滅的としか言いようのない被害。現地に足を踏み入れると、津波の威力は人間の想像をはるかに超えています。言葉ではうまく表現できません。東北地方は過去何度も大津波に襲われていますが、今回は医療の無力さを感じるばかりです。

被害の様相は行く先々で違います。例えば山が迫った町と平野部が広い町では津波被害の質も量も大きく異なります。「それぞれの町にそれぞれの津波災害がある。全部が違う」としか言えません。

今回の東日本大震災に学んだことはただ一つ。「過去の経験を生かして町の地形に応じた防災意識を高める以外にない」です。あまりにも甚大な自然災害なので、メディアからは状況が断片的にしか伝わりません。震災からすでに50日以上経過しましたが、被災地にはまだほとんど人の手の入っていない場所がたくさんあります。

そんな中、全国から数えきれないボランティアが来ています。北海道から、沖縄から、香港からも。70歳代もいれば、被災者でもある高校生ボランティアもいます。涙が出ます。

各自治体は分担を決め、例えば尼崎市は気仙沼市を支援しています。4月19日から宮城県石巻市でのボランティアに参加された知人から聞いた話です。なんと2泊3日（うち車中1泊）というハードスケジュール。2日間、津波を被った民間のヘドロかき作業に汗だくになって従事。けがと隣り合わせのかなりの危険作業も。しかし、途方に暮れていた高齢者には涙を流して感謝されたそうです。

まるで蟻のような作業。各地での膨大な仕事が待っています。作業服、作業靴、防塵マスク、ゴーグル、カッパなど自らの完全装備は必須。テントでのカップラーメン生活程度は覚悟を。必ずボランティア登録をしてください。

ボランティアはどこまでも自己完結が求められます。水道・電気がない場所がたくさんあります。体力・精神力に自信がない方は無理されない方が良いかと思います。

（5月2日記）

気仙沼市　宮城県北東端、太平洋沿岸の三陸海岸に位置する人口約7万3千人の市。東日本大震災で大きな被害を受けた。死者690人、行方不明者1531人、約1万人が疎開中（4月11日現在）。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。労働衛生コンサルタント。52歳。ブログ（http：／／www.nagaoclinic.or.jp／doctorblog／nagao／）が好評。

ひょうご